

重度・重複障害児のコミュニケーションにおける
他者への注意の発達を促す指導

古賀 精治・河野 麻由子・古長 治基

A Teaching Practice to Promote the Development of Attention to the Other
in Communication of a Child with Severe Motor and Intellectual Disabilities

KOGA, S., KAWAO, M., and KOCHO, H.

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第1号

2022年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 1, September 2022

OITA, JAPAN

重度・重複障害児のコミュニケーションにおける 他者への注意の発達を促す指導

古賀 精治*・河野 麻由子**・古長 治基***

【要 旨】 本研究では、他者への注意が十分に獲得されていない重度・重複障害児のコミュニケーションの発達について事例的に検討を行った。対象児は知的障害と肢体不自由を伴う特別支援学校小学部5年生の女児であった。実態把握の内容を踏まえて①玩具を見せながら呼名を行う指導, ②玩具を隠して呼名を行う指導, ③指導者を変更した指導の順に、全10回にわたって指導を実施した。児童の関心のある玩具と言語的働きかけを統合した関わりを行う中で、児童は物への関心が主である状態から少しずつ他者へ意識が向くようになってきた。また、パターン化されたやりとりの反復を通して、最終的に特定の他者に抛らない注意行動が獲得された。

【キーワード】 重度・重複障害 注意 コミュニケーション

近年、障害の重度・重複化が進んでおり、重度・重複障害のある児童生徒の支援が重要視されている。新生児・周産期医療の進歩により、低出生体重児の死亡率は激減していることから(三科, 2006)、この傾向はなおも続くと予想され、その教育について実践および研究がなされている。重度・重複障害の定義はいまだに確立されていないが(大江・川住, 2014; 高田屋・高橋, 2018; 長島・船橋, 2019)、本研究では先行研究等を踏まえ、重度の知的障害と重度の肢体不自由を伴う児童生徒のことを重度・重複障害のある児童生徒(以下、重障児)とする。

重障児への指導が成立するためには、子どもと指導者との意思のやり取りが基盤となる(吉川, 2006)。重障児の多くは障害が重度で言語を持たない前言語期のコミュニケーション段階であることから、乳児の発達モデルを参考に、関係性の発達について実践研究が行われていることが多い。例えば古山(2006)は、乳児の発達研究を手掛かりとして、重障児の共同注意関連行動とコミュニケーション行動の形成についての実践を報告し、初めは対象物のみへの注視だった重障児が、指導の過程において他者を行為の主体者として認識する段階になり、相互理解のある三項関係の成立につながったと述べている。また、吉川(2006)は、二項関係の段階に

令和4年5月31日受理

*こが・せいじ 大分大学教育学部発達科学教育講座(特別支援教育)

**かわの・まゆこ 大分県立臼杵支援学校

***こちょう・はるき 大分大学教育学部発達科学教育講座(特別支援教育)

